

スンダ語の「ka-動詞」構文と日本語の「～（ら）れる」との対照研究

イヌ イスナエニ シディック

パジャジャラン大学人文学日本語学科

inu.isnaeni.sidiq@unpad.ac.id

要旨

「ka-動詞」構文は非意図的受身という主要な用法として用いられるが、その他に結果の陳述用法、自発用法、そして可能文用法を持っている。それらの用法にはそれぞれの成立条件がある。また、その四つの用法のうち、対応しているのは自発用法と可能文の用法の一部である。意味的には対応しても、実際に構文の形式から見れば両言語は異なる構文を使用しているのが分かった。スンダ語の場合、「ka-動詞」構文は受動的であるのに対して、日本語の「～（ら）れる」自発と可能文は能動的である。また、スンダ語には日本語と同じように自動詞から形成される受身文が存在する。本論文ではそのタイプの「ka-動詞」構文を自動詞受身構文と名づけた。この種類の「ka-動詞」構文は日本語の「第三者受身」に似ていて、話し手がその事象が起きたことによって、何らかの被害を受けたり、迷惑を受けたりするという意味を表す。しかし日本語の第三者受身構文はある動作主が意図的に起こした事象が原因になることが可能であるが、スンダ語の場合は日本語と違って、その事象を起こすのはほとんど自然現象であることが分かった。

キーワード：スンダ語、「ka-動詞」構文、日本語「（～ら）れる」、第三者受身、

1. はじめに

スンダ語の受身表現には、「di-動詞」構文の他、「ka-動詞」構文もある。両者の相違点について、従来、スンダ語学者は、ある事象が意図的に行われるか、非意図的に行われるかの点で異なっていると指摘してきた。「di-動詞」構文は意図的な行為を表すのに対して、「ka-動詞」構文は非意図的な行為を表すとされている (Coolsma 1985, Budi 1996, Franz Muller-Gotama 2001)。さらに、Franz Muller-Gotama (2001) は、「ka-動詞」構文が表す事象は偶発的に起きるとも指摘した。しかし、実際には「ka-動詞」構文で表された事象は、非意図的、あるいは偶発的に起きてしまい、そして主語に立つ被動作主に被害を与えてしまうという意味を表している。しかし、日常の言語運用を観察してみると、受身用法の他に、「ka-動詞」構文は様々な用法で用いられている。

「ka-動詞」構文には、受身用法の他、可能、自発、そして結果状態の陳述もしくは受動完了の用法があり、これらの用法はそれぞれ異なる成立条件を持っていると思われる。本章では、「ka-動

詞」構文の意味的、形態的、そして構文的な特徴を述べ、日本語の「(ら)れる」と対応関係を有するものを対照する。

2. 「ka-動詞」構文の意味的な特徴について

スダ語の「Ka-動詞」構文は以下のようにさまざまな用法で用いられる：

①. 非意図的受け身の「ka-動詞」構文

(1) Sigana buku teh kabawa ku Ujang.

～ようだ 本 ka-持つて行く に ウジャング

その本はウジャングに持つて行かれたようだ (非意図的受身)。(再掲)

例 (1) は、ウジャングがとあるミニバスに乗っていて、目的地ではない場所に連れて行かれてしまった、という意味を表す。つまり、ミニバスの運転手も意図的にウジャングをバンジャランまで連れていくつもりはなく、ただ何らかの理由で、ウジャングの目的地を知らないまま乗せていた、という意味になる。一方、例(20)は、ウジャングが非意図的に本を持つていってしまったので、話し手が何らかの被害を受けている、もしくは迷惑するという意味を表している。

②. 結果状態の陳述/受動完了用法の「ka-動詞」構文

(2) Sakapeung sok aya jalan anu katutupan ku taneuh urug.

時々 ある 道 関係代名詞 ka-閉める-an 土砂崩れ

時々、崩れた土で覆われている (覆ってある) 道もある。

例 (2) では、*nutupan* 「覆う」という第二クラス他動詞が ka-接頭辞を付加され、*katutupan* 「覆ってある」状態を表す。

③ 自発用法の「ka-動詞」構文

(3) (Urang) kaingetan jaman baheula.

私 ka-思い出させる 時代 昔

(私は) 昔の時代が思い出される。→ 昔の事が思い出される。

例 (3) は、動作主である私が何らかの原因で自然に昔のことを思い出してしまうという意味を表す。訳を見れば分かるように、(3) の *kaingetan* は、形態的にも、統語的そして意味的にも、日本語の「思い出される」と一対一の対応をなしている。実は、非意図的受け身用法と状態の陳述用法の他に、スダ語の「ka-動詞」構文は、自発用法として用いられる場合もある。

④. 可能文用法の「ka-動詞」構文について

(4) A: Tadi nulis teu¹ ?

先 N-書く 否定詞

先のやつ、書いた？

B: Tulisanna oge teu kabaca!

書いた物 も 否定詞 ka-読む

書いた物が読めない。

→ 何が書いてあるのか読めない

例(4)では、動詞 *baca* 「読む」が「ka-」接頭辞を付けられることによって *kabaca* 「読まれる」という可能動詞になっている。

⑤. 自動詞の受け身の「ka-動詞」構文

(5) Budak teh batuk lantaran kamari kaanginan pas naek motor.

子供 咳 ～だから 機能 ka-風が吹く 時 乗る バイク

子供は、昨日バイクに乗った時、風に吹かれていたので、咳がある。

3. 「ka-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照

以上で、スダ語の「ka-動詞」構文の様々な用法を見てきた。その中には、日本語の「～(ら)れる」にも見られる自発用法や可能文の用法もあった。しかし、同じ用法が存在していても、当然両者の間には相違点もある。従って、本節では、両言語に存在する自発表現と可能表現を中心に、「ka-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」を対照し、考察を行う。非意図的受け身用法と結果状態の陳述用法は、日本語では「～(ら)れる」で表現されないため、本節では取り扱わないことにする。

3.1 自発用法「ka-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」の自発用法の対照

本節では、自発用法「ka-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」の自発用法を形態的・意味的・構文的な特徴の観点から対照する。しかし、その前に、日本語における自発構文について少し触れておくことにする。

仁田(2009)によれば、自発文とは、ある動きや思考、感情などが、能動主体の意志と関係なく、あるいはそれに反して主体の中で自然に起きてくることを表すものである。例えば：

・私には佐藤が犯人だと思われる。

・あの写真を見ると、笑えてしょうがない。(仁田：2009)

¹ teu は動詞と形容詞用の否定詞であるが、「はい」あるいは「いいえ」という答えを求める疑問詞が付かない疑問文を作る時によく用いられる。

日本語の自発文の述語は、述語動詞の語幹に「～(ら)れる」を付加して形成する。また、仁田(2009)は、元の文が他動詞の場合、一般に「に、が」の文型をとり、能動主体を表す名詞は、「は」が付加されて「～には」あるいは「～は」となるのが普通であると述べた。例えば：

- ・この季節になると私(には/は)故郷の家が懐かしく思い出される。(仁田：2009)

次に、スンダ語の自発用法「ka-動詞」構文と日本語「～(ら)れる」構文を、形態的・意味的・構文的な特徴の観点から対照する。

自発用法「ka-動詞」構文	日本語の「～(ら)れる」
(6) Karasa sedih lamun emut ka wanoja ka-感じる 悲しい もし 覚える に 女性 女性のことを思い出すと悲しく感じられる。	⇔ 女性のことを思い出すと悲しく感じられる。
(7) Sok kagagas pangalaman anu baheula. 擬態語 ka-思い出させる 経験 関係代名詞 昔 昔の経験が思い出される。	⇔ 昔の経験が思い出される。
(8) Hawar-hawar kadenge sora adzan 擬態語 ka-聞く 声 アザン 遠くからお祈りの呼びかけの音が聞こえる。	⇔ 遠くからお祈りの呼びかけの音が聞こえる。
(9) 対応する自発用法「ka-動詞」構文がない	⇔ 私には佐藤が犯人だと思われる。
(10) 対応する自発用法「ka-動詞」構文がない	⇔ あの写真を見ると、 <u>笑えて</u> しょうがない。

上記を見てわかるように、例(6)、(7)、そして(8)では、スンダ語と日本語の自発用法が意味的に一致し、対応している。しかし、日本語の例(9)と(10)に対応する自発用法は、スンダ語には存在しない。その理由は、日本語とスンダ語の自発用法の形態的な特徴の違いにあると考えられる。日本語もスンダ語も、自発構文の動詞に関して、思考・感覚・感情などを表す動詞からしか作れないという点は共通しているが、自発用法で使える動詞の語幹は、スンダ語の方が数が少ない。そのため、例(9)と(10)の日本語の例をスンダ語で表現すると、「ka-動詞」構文ではなく、別の形式で表現することになる。例(10)の場合は、*jadi hayang*～「～したくなる」と一緒に用いられて、以下のようなになる。

(11) Lamun ninggali foto itu, sok jadi hayang seuri.

もし 見る 写真 その 擬態語 なる ~したい 笑う

その写真を見ると、(自然に) 笑いたくなる。

一方、例 (9) をスンダ語で表現する場合は、*Ceuk urang mah Sato Penjahatna*. 「私に言わせれば佐藤さんが犯人だ」という名詞文によって表現されることになる。

また、構文の特徴の観点から比べると、日本語もスンダ語も、経験者は文中に現れないが、日本語の経験者は主語の位置にあるのに対して、受動文の形式を取るスンダ語の経験者は、*ku* 「によって」というマーカーでマークされ、動作主の位置に立つ。しかし、支配する位置が異なっても、自発文の経験者は実際にその事象を自ら経験しなければならないので、通常は一人称であると考えられる。また、スンダ語の自発を論じた際に触れたように、一人称以外の人物を経験者として文内に登場させる場合は、何らかの形で、話し手と経験者が、文で述べられていることについて情報を共有していなければならない。スンダ語では伝聞を表す *cenah / saurna* (尊敬語) を用いる場合が多いが、日本語の場合は認識モダリティの形式が付加される。

3.2 可能文の「ka-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照

可能文とは、スンダ語でも日本語でも、ある動作主が意図的に動作を行おうとするとき、その動作の実現が可能か不可能かを表すものである。しかし、形態的に見ると、日本語の可能文の接辞である「～(ら)れる」は自動詞と他動詞に付くことができるが、スンダ語の「ka-」接頭辞は、二項動詞に付いた時のみ受動的可能文を形成することができる。従って、日本語では「～(ら)れる」によって表現できるものが、スンダ語では別の可能文形式で表さなければならない。例えば、日本語では、「泳ぐ」を「泳げる」という可能動詞にすることができるが、スンダ語の場合は、*ngojay* 「泳ぐ」を *ka-oyay* 「ka-泳ぐ」にすることができない。述語動詞が自動詞の場合は、*bisa* 「できる」+*N*-動詞」という形が用いられる。その形式は、「死ぬ」、「落ちる」のような瞬間自動詞以外の動詞に当てはめると、能動的可能動詞を形成することができる。主語に関しては、受動文形式を取る「ka-動詞」構文の場合は、有情物でも非情物でも主語になり得る。それに対して、能動文の形式をとる日本語の「～(ら)れる」可能動詞のほとんどは、アニマシーが高い有情物を主語に取る。

可能用法「ka-動詞」構文	日本語の「～(ら)れる」
(12) <i>Tulisan leutik oge kabaca ari</i> 書いたもの 小さい も ka-読む なら <i>make kacangata mah.</i> 使う めがね 小さく書いた文字でもめがねを使うと読める。	⇔ 小さく書いた文字でもめがねを使うと読める。

- (13) Ti imah ka sakola bisa leumpang. ⇔ 学校から家までは歩ける。
から 家 へ 学校 できる 歩く
家から学校までは歩ける。

4. まとめ

スンダ語の「ka-動詞」構文はいくつかの意味を表すために用いられる。それは：

- ①. 非意図的受け身の「ka-動詞」構文
- ②. 結果状態の陳述/受動完了用法の「ka-動詞」構文
- ③. 自発用法の「ka-動詞」構文
- ④. 自動詞の受け身の「ka-動詞」構文
- ⑤. 可能文用法の「ka-動詞」構文

その五つの種類の内に、対応しているのは自発用法と可能文の用法の一部であることがわかった。意味的には対応していても、構文の形式から見ると、両言語は異なっている。スンダ語の場合、「ka-動詞」構文は受動的であるのに対して、日本語の「～(ら)れる」自発と可能文は能動的である。

参考文献

- Coolsma, S. (1985) *Tata Bahasa Sunda*. Terjemahan Husein Widjadjakusumah dan Yus Rusyana. Jakarta: Djambatan.
- Danadibrata, R. A. (2006) *Kamus Basa Sunda*. Bandung: PT Kiblat Buku Utama
- Djajasudarma, T.F. (1980) *Tata Basa Sunda*. Bandung: Rahmat Cijulang.
- Huddleston & Pullum (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge University Press.
- Karna Yudibrata (1989) *Bagbagan Makena Basa Sunda*. Bandung: Rahmat Cijulang.
- Kats, J. & M..Soeridiradja (1982) *Tata Bahasa dan Ungkapan Bahasa Sunda*. Terjemahan Ayatroedi. Jakarta: Djambatan.
- Inu Isnaeni Sidiq (2012) *International Seminar on Improving The Competence of Conversation Skill in Learning Japanese Language in Secondary and Higher Education in Indonesia*, Asosiasi Studi Pendidikan Bahasa Jepang Indonesia: pp.341 -351.
- Quirk, Randolph et al. (1972) *A Grammar of Contemporary English*. London: Longman Group Ltd.
- Robins, R. H. (1970) *Diversions of Bloomsbury*. North-Holland Publishing Company.
- Robins, R. H. (1983) *Sistem dan Struktur Bahasa Sunda*. Penerbit Djembatan (terjemahan).
- Siewierska,Anna. (1984) *The Passive, A Comparative Linguistic Analysis*. London: Croom Helm.
- Sumarsono, Tatang. (1995) *Maher Basa Sunda*. Bandung: Geger Sunten.

- Tamsyah, Budi Rahayu. (1996) *Galuring Basa Sunda*. Bandung: Pustaka Setia.
- 安藤貞雄 (2012) 『現代英文法講義』 開拓社.
- 上田功・野田尚史 (2006) 『言外と言内の交流分野：小泉保博士傘寿記念論文集』 大学書林.
- 影山太郎・岸本秀樹 (2004) 『日本語の分析と言語類型—柴谷方良教授還暦記念論文集』 くろしお出版.
- 影山太郎 (編) (2008) 『日英対象・動詞の意味と構文』 大修館書店.
- 許明子 (2004) 『日本語の受身と韓国語の受身文の対照研究』 ひつじ書房.
- 久野暉 (1978) 『日本文法研究』 大修館書店.
- 河野六郎 (1995) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』 三省堂.
- 佐久間淳一・加藤重広・町田健 (2006) 『言語学入門』 研究社.
- 佐久間鼎 (1966) 『現代日本語の表現と語法』 恒星社厚生閣
- 柴谷方良 (2000) 「ヴォイス」 仁田義雄他 (著) 『文の骨格』 岩波書店
- 高見健一 (1997) 『機能的統語論』 くろしお出版.
- デディ・ステディ (2006) 「インドネシア語の「di-動詞」構文と日本語の「～(ら)れる」との対照研究」 『日本言語文化研究会論集第2号 p.303 - 339』
- 寺村秀夫 (1982) 『言語の対照的分析と記述の方法 (講座日本語学 10)』 明治書院.
- 名古屋大学日本語研究会 GA6 (2004) 『ふしぎ発見！日本語文法』 三弥井書店.
- 日本語記述文法研究会 (2009) 『現代日本語文法 2』 くろしお出版.
- 三上章 (1972) 『現代語法序説』 くろしお出版
- 山田小枝 (1990) 『モダリティ』 同学社.
- 山田敏弘 (2004) 『国語教師が知っておきたい日本語文法』 くろしお出版.
- 湯浅彰子 (2003) 「'Volitionality' と 'Responsibility'—インドネシア語における3種の受動表現 'di-'ter-'ke-an)」 『甲南女子大学研究紀要 (文学・文化編 40号)』、pp 85-91.
- リズキ・アンディニ (2012) 「インドネシア語における受動文としての ter-構文の意味役割」 *Nagoya Working Papers in Linguistics* 27, pp 13-28.
- 辞書類：
『広辞苑 (第五版)』、岩波書店、2002.
- データの出典：
スンダ語の月刊誌 *CUPUMANIK*, 2003年1号(8月)-4号(11月).
- R. Memed Sastrahadiprawira (2009) *Pangeran Kornel*. Bandung: Kiblat.
<http://chiebukuro.yahoo.co.jp/>